

矢部一郎先生を偲んで

蔵方 宏昌

本学会の元常任理事 矢部一郎先生と初めてお会いしたのは、30数年前に開かれた仙台の日本医史学会総会だった。その翌年、私は医史学会雑誌の編集委員に加えていただき、矢部先生、大塚恭男先生、酒井シズ先生たちと親しくしていた。当時、編集委員会が終わると、第二編集委員会と称して、お茶の水や四谷などで飲み会をするのが恒例だった。

話好きの矢部先生は、タバコを喫い、酒を飲み、いろいろな事を話題にされた。私の学会発表の仕方なども注意され、おかげで私もいろいろと工夫するようになった。このような席では、矢部先生は食べ物にほとんど手をつけず、タバコと酒だけになり、勧めても食べない。肝臓病で入院したことのある私は、矢部先生の肝臓を心配していたが、クモ膜下出血を起してしまった。タバコの喫い過ぎによるのかも知れない。

1991年(平成3年)5月1日矢部先生の奥様から電話をいただき、翌日、大塚先生と公立昭和病院に行き、手術後、昏睡状態にある矢部先生を見舞った。奥様から「大丈夫でしょうか」と聞かれたが、私たちは「ここ数日を乗り越えたら大丈夫でしょう」としか言えない状態だった。入浴中に「やられた！」と叫び風呂から飛び出してきて、救急車が来た時は意識がなくなっていたという。

一命を取り留め、順調に回復され、退院されるまでになった。その年の6月京都で日本医史学会総会が開かれ、見学会で島津医療器械資料館に行った折、教材用の独楽を買い帰ってから矢部先生宅を訪れた。

言葉を時々忘れたり、話が噛み合わないこともあるが、声に張りがあり、呂律も普通に近くなっていた。リハビリ用にと京都みやげの独楽を渡すと、拵ってみせてくれた。捉まりながらも立った



矢部一郎先生

り坐ったりするのを見て、私は回復の希望を持った。

翌年12月、立正大学大崎校舎で洋学史学会が開かれ、車椅子に乗ったままだったが、名誉実行委員長として矢部先生が挨拶された。張りのある声で淀みなく話され、涙が出る程嬉しかった。

その後、一進一退しながら自宅で闘病生活が続き、時々入院されたりして、2008年(平成20年)10月18日亡くなられた。享年78歳。奥様から電話をいただいたが、葬儀に行かれず、12月下旬に御自宅にうかがった。御遺骨は置かれてあったが、仏式の飾りがなく、戒名を書いた位牌もない。不思議に思っていると、奥様から「矢部がクリスチャンだったことを知っていましたか」とおっしゃる。初耳だったので「一度もそのような話は聞いたことがありません」と答えると、「プロテスタントの教会に時々行っていたので、葬儀はプロテスタントの教会でしました。教会での式はどのようにするのかかわからず戸惑いました」と言わ

れた。矢部先生がクリスチャンだった事は、本人からも、先生の親しい方たちからも聞いた事が無い。様々な話をされていた矢部先生から宗教の話を一度も聞いた事がなかったので意外であった。

矢部先生は旧制成城高校を卒業して、新制の東京都立大学理学部生物学科に編入された。大学院では生物学を専攻されていたが、生化学の研究をされ、理学修士号を取得された。生化学を研究されていたので、医学博士号取得を目指している医師の論文作りを手伝ったりした、と生前話されていた。

1953年(昭和28年)都立大学を卒業されると、私立武蔵高校で生物を教えるようになり、次いで武蔵大学で生物学を教えていたが、1973年(昭和48年)から茨城大学、法政大学、恵泉女学園短大などで科学史も教えるようになった。1976年(昭和51年)4月から立正大学教養部助教授として科学史を専門とするようになる。生物学から科学史への転向について、立正大学教養部論集『ロータス』第10号(1976年)に「私の科学史への道」と題してエッセイを寄せている。

「大学を出てから、大変決断を要した事は、立正大学に来る事と共に、蘭学史研究への転向であろう。今迄、実験生物学を志し、生物学の教員であったものが、全然知り合いもない他の研究分野へ転向することは大変不安であった。私は蘭学史の研究が自分の道業であり、それでの立身出世は考えていなかった。少なくとも、

当初はそう思っていた。しかし、研究する以上はオーソドックスに研究していきたいと考えていた。……(中略)……その後、私は蘭学史、江戸期生物学史の研究者ということになっている。お陰で、現在立正大学に居るのである。」

私が知っている矢部先生は、生物学から離れ、蘭学史と生物学史の第一線研究者である。宇田川榕庵の『植学啓原』『植学独語』の研究、江戸時代に舶来した植物学書の研究、江戸時代の西洋遺伝学を受容などの研究があり、ティラーの『生物学の歴史』の共訳、『植学啓原』研究書の出版、また啓蒙書として『西洋医学の歴史』『江戸の本草学』を著した。日本医史学会雑誌に「江戸時代の腊葉について」論文を発表された時、私は、生物学を学んだ矢部先生に適した研究と思い、「江戸から明治に作られ、残されている腊葉を研究して欲しい」と話したことがあった。矢部先生もその気になられ、高知の牧野植物園に行き、腊葉標本を見に行く予定であったが、お互いに都合がつかず実現しなかった。

またの機会にと思っていたが、矢部先生が倒れられ、実現する機会を失った。矢部先生は1930年(昭和5年)2月12日生まれなので、倒れた時は61歳である。立正大学教授に昇格して数年後という。まだ現役で活躍されている最中であり、返す返すも残念である。

ゆかりびと

縁人 また一人逝く 秋の暮